

鎌倉散策余話

上原 昇（2組）

▼長谷寺で久米正雄に

11月29日に「蕨の会」一行10名が古都鎌倉を散策したことは、当HPの12月5日付で塩川明男君（6組）がレポートしてくれました。筆者も参加して2万歩を踏破しました。

鎌倉には昔から文士といわれる人たちが大勢住んでいました。

先日の鎌倉ツアー最後の訪問地は長谷にある長谷寺でした。夕暮れが迫って帰路に入る頃、寺の出入り口付近に設置されている胸像に気が付きました。

見ると久米正雄像とあり、確かこの人は上田の人ではと思い、帰宅後で調べてみたら明治24（1891）年に上田で生まれています。

父親が上田尋常高等小学校（現清明小）の校長で上田に赴任してきたようです。

久米本人は事情があって小学生の時に福島県に転居していますから上田との縁はそんなに深くありません。久米は夏目漱石の門人として作家、俳人として多彩な活躍をしました。

鎌倉との縁は、大正14（1925）年から61歳で亡くなるまで鎌倉に居住しており、鎌倉ペンクラブの初代会長を務めています。

関東大震災の際に長谷寺に疎開していた縁で胸像が建てられたと説明文がありました。

▼鎌倉と大佛次郎

さて、鎌倉文士で著名な作家に大佛次郎（1897-1973）がいます。ペンネームの由来は大佛（大仏）からも分かるように、長谷の大仏の裏手に住んでいたことによるとのことです。

大佛は鎌倉の景観を守る活動を積極的に行い、昭和39（1964）年には「鎌倉風致保存会」の設立にあたり発起人の一人となっています。

▼映画「赤穂浪士」

話は変わって、12月と言えば忠臣蔵の話題が聞こえてきます。元禄15年12月14日（旧暦）が赤穂浪士の討ち入りが行われた日だからです。

今の世代は忠臣蔵や赤穂浪士といってもピンと来ないかもしれませんが、その昔は小説、映画、歌舞伎、TVなどで年中行事のように取り上げられたものです。

ある映画評論家によると、忠臣蔵映画は戦前戦後を合わせ、総計300本を超すそうです。

映画好きの筆者も歴代の忠臣蔵（赤穂浪士）作品を何作か観ています。

「赤穂浪士」という題名がつく映画は原作者が大佛次郎です。昭和2（1927）年、当時の東京日日新聞（現在の毎日新聞の前身）に連載された同作は、元禄時代の世相や体制に対し批判的な視点を入れたことで有名です。

今年も師走のこの時期、忠臣蔵映画が上映されることを聞きつけて行ってきました。

12月11、12日の二日間、池袋の新文芸座での歳末恒例企画、「赤穂浪士」（昭和36（1961）年3月公開、東映版、松田定次監督）です。

忠臣蔵は大石内蔵助、浅野内匠頭、吉良上野介を始め登場人物が多いので、まさにオールス

ターキャストで盛り上がります。

面白いことに、東映では昭和 31 (1956) 年正月に「赤穂浪士 天の巻 地の巻」が、昭和 34 (1959) 年正月には「忠臣蔵 桜花の巻 菊花の巻」という作品が公開されていますが、監督は全て同じく松田定次で、筆者はこれも観ています。

主演の大石に扮しているのは、56 年版が市川右太衛門、59 年と 61 年版は片岡千恵蔵と当時の東映の二大看板スターが交代で演じています。

「赤穂浪士」の方は大佛次郎が創作した堀田隼人や蜘蛛の陣十郎といった架空のキャラクターが狂言回しを演じているのが興を添えています。

▼大河ドラマの「赤穂浪士」

忠臣蔵はNHK大河ドラマでも何度か取り上げられています。特に大河ドラマ第 2 作目の「赤穂浪士」が昭和 39 (1964) 年放映されたのを覚えている諸兄も多いことと思います。長谷川一夫が大石を演ずる同作は、第 47 話(「討入り」)で視聴率 53%を記録したというから、殆どどの家庭で観ていたことになります。

本当に昭和は遠くなりました。

鎌倉から話が半分それてしまいましたが、「おのおの方、お付き合い有難うございました。」



長谷寺の久米正雄胸像



映画「赤穂浪士」ポスター

(2023 年 12 月 12 日記)

以上